

屋敷と家屋の安寧に——そのまじなひ世界

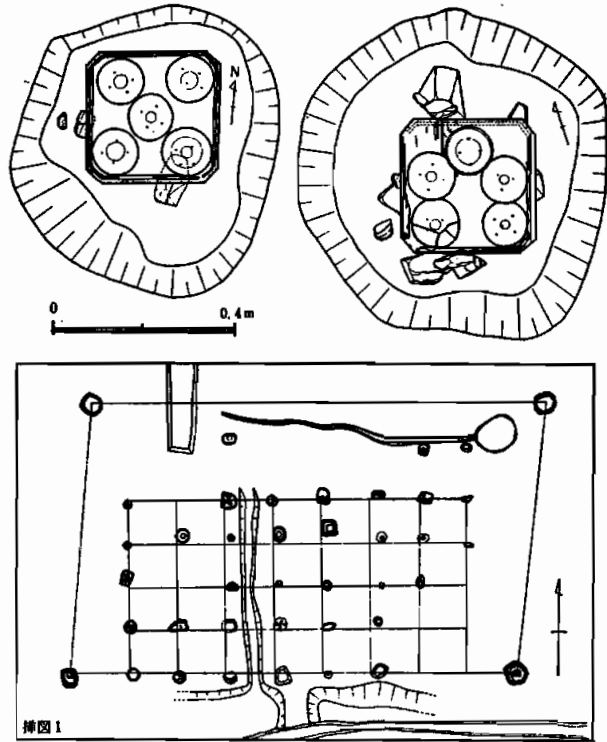
* 水 野 正 好

人生夕昏れ時に屋敷を求め家宅を営む、人生の門出に当り屋敷を得家屋を造る、たとえそのいずれであらうとも、人生、屋敷を作り家宅を設けることは極めて大事であり、多くの望みと夢を託し、またその中で過す人生——未来の安寧を願う心根の揺れ動く場であることはいまさら改めて言うまでもあるまい。こうした屋敷と家宅に彩られた心根の動きに息づくものとして、まじない・呪儀といった世界が生きている。その世界は、平安を願い、安寧、富貴を望む者の必ず念じていたる世界であり、その実現に験者なり、導師を得て確証を得、永遠の幸甚を保証する世界であった。人生の大事、家族の大事、氏なり家の大事であっただけに、真剣に考えられ、終始ことあるごとにまじない・呪儀をもって、屋敷、家宅は包みこまれ、凶事は吉事に、善事は一層の善事に転ずるようとりはかられて来たのである。従って、屋敷・家宅をめぐるまじない・呪儀の世界は、人々の願望を充足させ、静かな日常生活を得させる、極めて重要な機能を果たしたのである。まじない・呪儀の在り方を通じて、その時代、その時代の人々の想いなり心根を窺い、「人」を問う、そうした大切な作業が果せるのではないか、こうした考えに基いてここに私なりの語りを記してみたいと思うのである。

一、屋敷地取作法の世界

昭和五五年、元興寺文化財研究所が実施した高野山金剛峯寺宝性院跡の発掘調査で、一つの重要な所見が得られた。調査では宝性院本堂と考えられる雄大な規模の建物を発見し、この建物の建築と関連する興味深い遺構の存在が浮かび上った。本堂を建設する敷地の四隅と中心を点じて、径六〇^釐、深さ二〇^釐の円穴が掘られ、それぞれに五枚の磁皿をのせた折敷（八寸）が据えられていた。この五枚の磁皿には各々、盛り物があり、折敷ともども丁重に円穴に埋められていた。こうした四隅を点じた円穴で、東西三六^釐、南北二六^釐を区劃し、内を聖化し、中心に点じた一穴を聖心としている。その劃された面積は実に広範囲である。ところで、四隅を点じたこの広さの中に、一棟の、それも東西七間（二七^釐）、南北五間（一九^釐）という雄大な江戸時代中期の本堂が南に寄せられて建てられているのである。心を点ずるその在り方を通じて本堂の建設に先立ち、その敷地の四方を、また中心を点じて呪儀が実修され、のち、その敷地の南に寄せて本堂が営まれたことが容易に知られるのである。

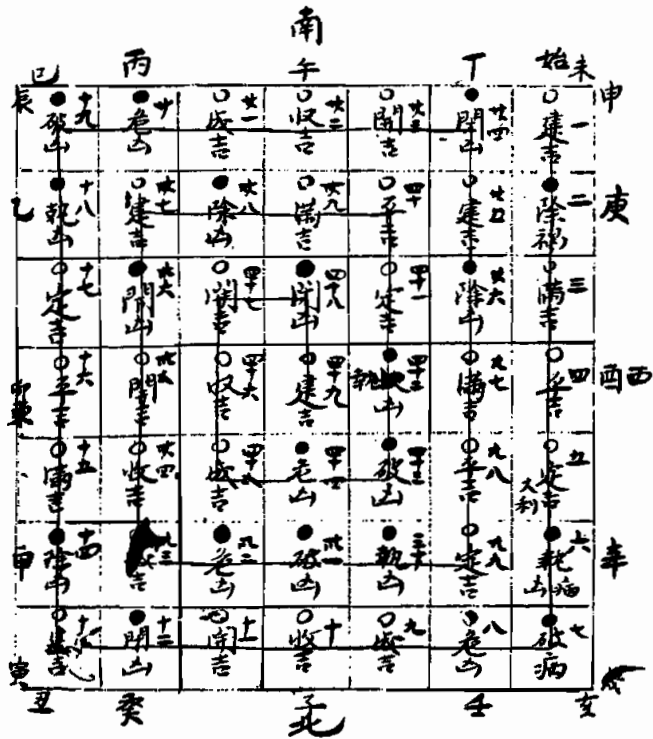
高野山金剛峯寺宝性院跡で発見されたこの類例少い遺構を私は「屋



敷地取作法」の実修を語る遺構ではないかと考えている。河内千手寺・木下密運師架蔵に係る「屋敷地取作法」の書名をもつ一本には、「造作新造ノ時、地神ニ地ヲ奉乞事」としてこの呪儀について詳細が語られている。屋敷地を点定するこの作法は、まず家の大小により土地の四方と中央の五所に長さ八寸、広さ一寸二分の札が樹てられる。中央の札は[●]字一字、東の札には[●]本来無東西の句、南の札には[●]悟故十方空の句、西の札には[●]何處有南北の句、北の札には[●]迷故三界城の句がしたためられ、所定の方に樹てられるのである。次にこの四

方・中央の札の許に五色一五穀粥、切華、抹香、散米・味支の五膳を盛った折敷を据える。中心には七条袈裟を敷き、中央の札を袈裟上に置き、別に膳をすえ大土器一つを用いこの地の聖性を表示するとともに、特別な意味をもたせるのである。導師は七条袈裟上に膳を敷いて北向に坐し、呪儀がはじまる。まず花枝をとり三礼、つづいて誦頌、その言葉には「夫れ大海に袈裟を浮れば金翅鳥玉の如し、竜を害することなし、大地に袈裟を敷けば堅牢地神人に崇ることなし、故に解脱幢相の福田衣を敷き、不生不滅の三摩地を乞う。願くは地天井眷族必ず納受し給え」といった句が誦される。袈裟を通じて堅牢地神の威を得て諸祟を除き、この敷地を不生不滅の三摩地とせんと呪しているのである。七条袈裟の誦頌の次は施甘露の真言を誦する。四方・中心の札の許に供した五膳を地神にすすめ、神の納受を得て一層の庇護を得ようと呪作するのである。こうして四方中心を点じて寄り来る邪気悪霊を防ぎ内なる世界を聖化し、地神に五膳を供してその冥助を乞い屋敷地を得るのである。こうした呪儀のうち、屋敷地として劃した四方の札のたつ各辺に七杭を指し、東西南北各七行、縦横に水繩を張り四九坪を作る呪作がなされる。この四九坪に未申角より戌亥角へ、つづいて寅丑角、辰巳角へと順次、建除満平定執破危成収開閉の十二運を配していく。従って未申角―南西隅に建が置かれ、ラセン状に中心へ向かい、中心に建が配られることとなる。十二運の建に始まり建に終るのである。こうして各坪には十二運の各運が規則正しく与えられるが十二連中の建満平定成収開の七運が吉、除執破危閉の五運が凶とされ、結果屋敷地の四九坪は吉坪、凶坪に二分されることとなるのである。水繩を張り作り出した四九坪には吉坪に白紙を挟んだ真野竹が、凶坪には青紙を挟んだ真野竹が指され、やがて凶坪の土を蹴ですくい折敷に入れて玉女の方に捨て去り、悪土をもつ凶坪は善土を具えた吉

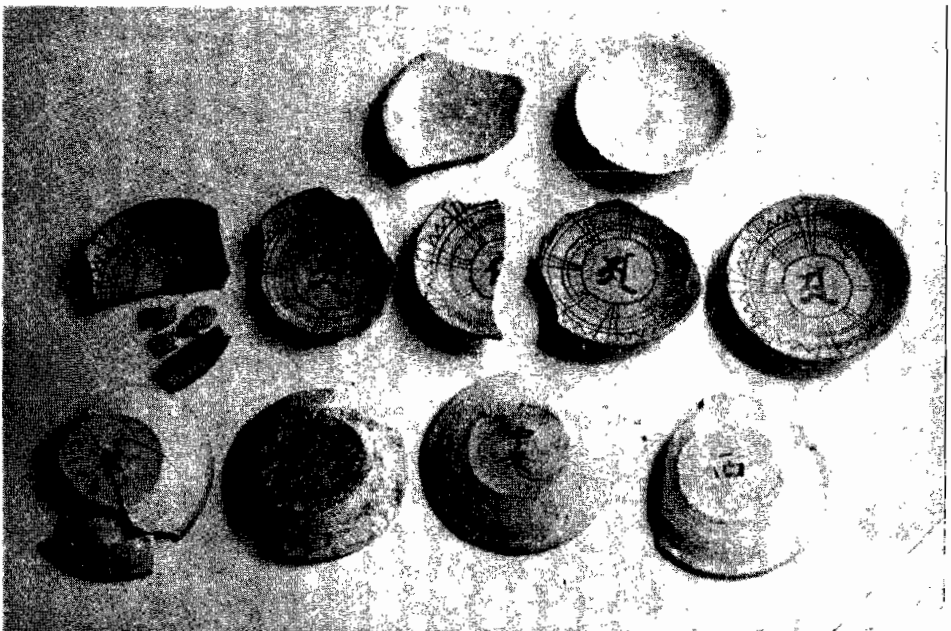
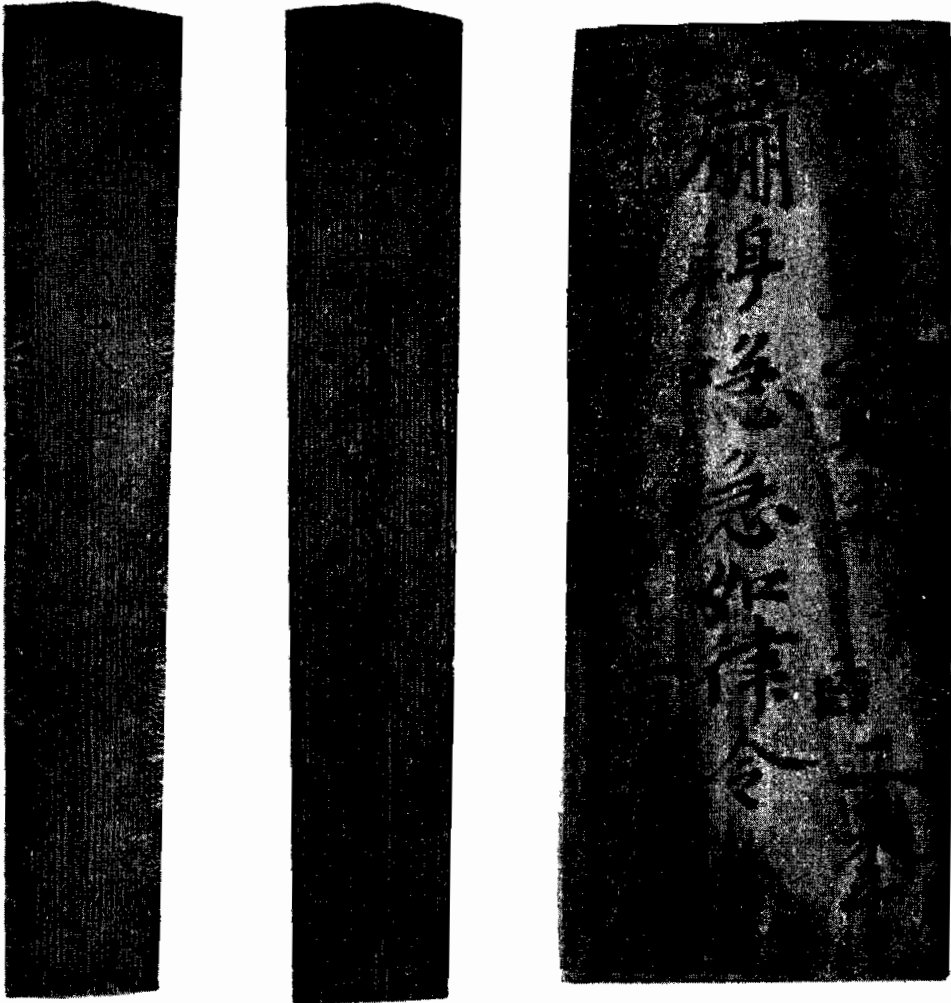
坪と化するのである。こうした凶坪の全てが吉坪となると屋敷地の四九坪は善土に満ちた吉善の地として屋敷を営むに適した土地として息ずいていくこととなるのである。別の一書では吉凶の各坪の土をとり吉坪の善土を凶坪の悪土に、凶坪の悪土を吉坪の善土に混じさせることにより全坪を善土に化すると説く、また一書にはむかい合う未申角と寅丑角が共に吉坪であり、戌亥角と辰巳角が凶坪であるところから各角坪の善悪向土をいれ換え善土とすると説くものもあるが、凶坪の悪土を除くとする説が基本となるものと考えてよいであろう。



四方中心を点じて屋敷地を劃して地神に乞い、後、地を東西七行、南北七行、計四九坪に分ち十二運を配して吉凶の坪に分け、凶坪の悪土を除くことで全坪―屋敷地全体が吉地―善土と為るといった呪儀が「屋敷地取作法」と呼ばれ広く各方面で実修されていたのである。高野山金剛峯寺宝性院で発見された遺構はまさにそうした呪儀を語る重要な遺構と言えるのである。寺院や神社のみならず屋敷をもめぐってこうした屋敷地取の作法が実修されるのであるが、こうした丁重な呪儀は古代・中世前期には見られず、中世後期から近世に盛行するのである。屋敷地を得、家宅を営むに先だって永遠の吉運善土が希われているのである。今日には見られない思惟と言えるであろう。

二、地鎮・鎮壇呪儀の世界

滋賀・岐阜両県境にそびえる伊吹山、その東麓―美濃に伊富岐神社が鎮座する。この社殿の中央地下から一点の壺が掘り出され、その中から多数の皿が見出された。この皿は、注目すべきものであった。(写真下略)内面に輪宝が墨描きされたもの、外底に北・南・西・東・中央と墨書したものが見られたのである。先述の屋敷地取作法が四方と中央を点じて呪儀を実修するのと同様、東・西・南・北・中央を点じた皿であることが墨書から読みとれ、またそれぞれに輪宝を描く皿が共伴したことが推察できるのである。輪宝は仏教で仏敵に対峙する武器として用いられるものであり、障礙神を倒し、寄り来る障礙神を防ぐ、そうした機能の象徴として存在するものである。四方・中心にこうした輪宝墨描土器を配することは、四方を劃し、全ゆる障礙神に対して境立とする、その侵入を防ぎ内なる世界を聖化しその聖性を護る意味をもつものである。こうした輪宝を描く皿を用いた呪儀は、いくつかの作法書から明きらかにすることができる。たとえば「法則等」には中心



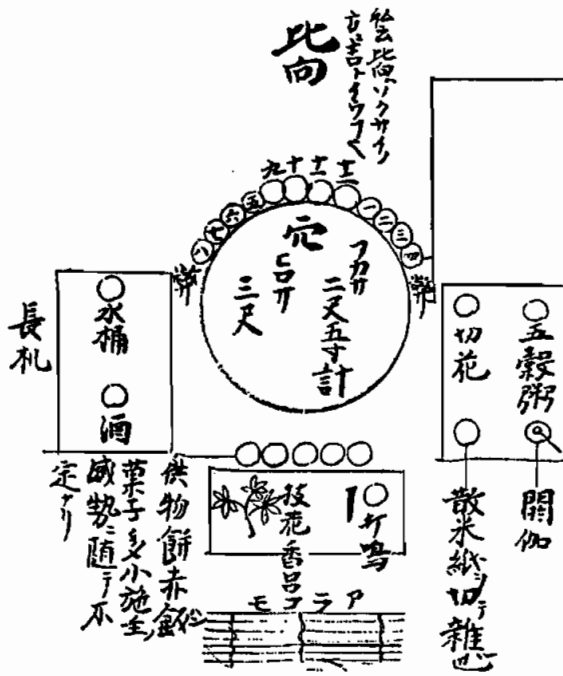
に「**字**」を容れた輪宝を図し、「此輪宝ヲ土器五ニ書テ東西南北中央ニ埋メハ成ニ金剛不壊ノ地ヲ万宝ヲ出シ、不祥災難等不起也」と記し、その用途目的を明きらかにしているし、『両部神道記』には屋敷祭次第と題して丁寧な輪宝を描き「如是紙八葉切書ス、カワラケニ入フタニモカワラケヲメ屋敷ニ荒縄ヲハリチガイメニ正中エ穴ヲホリ可埋」と見える。また『修験常用秘法集』の地鎮祭法には「土器の内にはの如く輪宝も書き、粥の五穀を少し入れよ。又、土器に「**字**」を書き蓋を覆ひて之を埋むべし。堂塔社相の地鎮は中央に之を埋むべし。人の屋敷には四壁の内、氏神の祠の下に埋むべし。又その館の内に社なくんば、戌亥の角の柱の下に埋むべし。悪土等の札も爰に埋むべし。井に建除之れを埋むべし。」とあり、つづいて戌亥隅の土を辰己隅に埋め、辰己の隅の土を亥亥の隅に埋めるなど交互の土を入れ替える呪儀のあることまでを詳細に記している。輪宝を描く土器は、屋敷地を金剛不壊の淨地とし、繁栄と辟邪を齎らす淨地とするために四方中央、或いは中央を点じて埋め輪宝の聖なる力により永久の繁昌を得ようとしているのである。こうした輪宝を墨書する土器の使用は、単純な地鎮め、地鎮祭というよりも、むしろ『修験常用秘法集』にも掲げるように「屋敷地取作法」と大きく重なり合うものであり、四方、中央に樹てる札とも、また吉凶坪（善土悪土）にたてられた十二運札とも鮮やかに吻合しているのである。今日、各地で輪宝を墨書する土器は数多く発見されているが蓋身を合せた一具のみの発見であり、伊夫岐神社の一例のみが五具一括顕現の例である。いずれにせよ、屋敷地を地神に乞う屋敷地取作法が広い意味では地鎮そのものであることもあって、地鎮・屋敷地取作法といった呪儀に輪宝墨書土器が登場するのである。

輪宝を墨書する土器の系譜は、輪楪を用いての地鎮に求められるで

あろう。輪と楪と瓶を用いての地鎮については、『地祭鎮瓶輪楪事』に五宝・五穀・五葉・五香を包み瓶中に入れ蓋しその上を五色糸で絡み結ぶ。深さ二尺八寸、広二尺五寸の穴を掘り地鎮供養が終るとこの穴中に鎮瓶・輪楪等を埋めるといった記事があり、方毎にも輪楪をたてると記し時には中央のみならず、四方にも埋める作法のあることを語っている。ただ、こうした輪楪、瓶を用いての呪儀は、古くは鎮壇を中心にして展開しており、大和興福寺大御堂、河内金剛寺多宝塔、近江石山寺の多宝塔下にその顕著な例が見られる。建物を載せる基壇の中心に一穴を掘り中央に賢瓶を据え四方八方に輪楪を樹て粥皿などを周囲に配した整然たる鎮壇遺構が見られるのである。屋敷地、伽藍地、建物地の全体を鎮め地神に乞う地鎮とは異り、建物の建つ地―基壇を鎮めその建物の永遠長久を地神に祈る祭りが鎮壇である。平安時代に属する先述の三寺の例とは別に、越前朝倉一乗谷では朝倉式部大輔景鏡館跡の主殿かと考えられる建物内から越前焼の一壺が発見され、その内には響銅製瓶が容れられており瓶中から大麦、小麦、米、赤米、胡麻、稗、金枝、杉枝、琥珀などが発見されている。鎮壇の一例であるが輪楪を欠き賢瓶を具えるといった興味深い例であり、近世の一般の鎮壇の姿をよく伝えている。

ところで、地鎮のまつりに関しては、輪宝、楪、賢瓶を用いない一つのタイプが見られる。輪、楪、賢瓶は元来鎮壇の用に宛てられたものと考えられる。別の地鎮のタイプは土公供とされるものである。広さ三尺、深さ二尺五寸ばかりの穴を穿ち、その奥と両脇に各四本、計十二本の幣串を指す。この幣串は長さ二尺五寸、幅一寸二分の木串であり銭形を懸けるが、この十二串は十二月神を象るものとされる。穴の前には二脚の机を対に置き、一に粥、關伽、切花、散米、一に白酒を配する。その前面には長机を置き鏡、鐘木、切花をのせ、導師の座

幣十二本但濁月アラハ十三本



『上公供作法』所掲上公供祭場

―薦を前に敷く。作法の次第は、導師が座に蹲踞し、年月日を称し中臣祓祭文を読み、水壇を作り金剛合掌して地を加持し、次に不動真言劍印加持し水をそそぎつつ鋤でもって方三尺の穴を掘る。如来慈護真言を誦し、八陽経真言、普供養明を誦し、天鼓地鼓四方鼓を三遍打ち地天を驚覚せしめ次に地天を勧請、杓で以て湯醴油等の和合の水を穴内に散じ、花を供し、粥を散供する。次に地天真言をはじめ各真言、各呪を誦し廻向し、撻遣して終り鋤を以って穴を埋めその上を堅固に

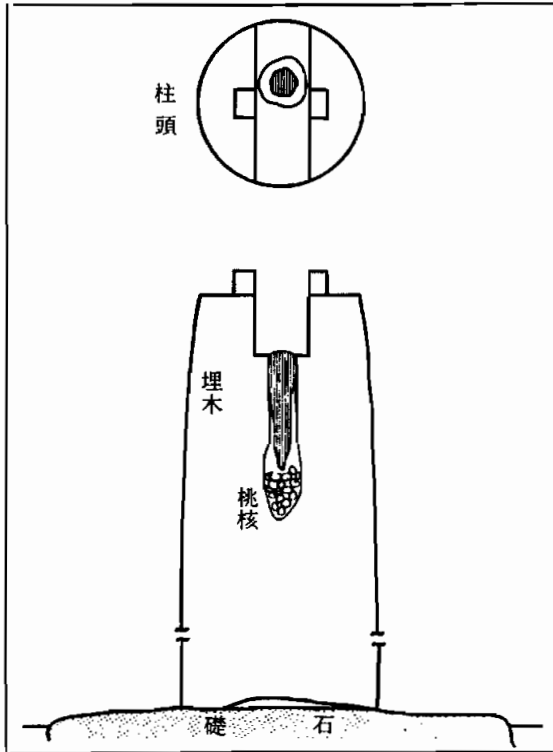
するといふ。穴中には供物、幣串、銀銭等が悉く埋められると説く一本もある。こうした土公供作法を実修したと考えられる遺構も最近、各地で検出されている。松田正昭氏の紹介された一住宅をあげよう。住宅敷地内に一穴が掘られておりその穴中から鉄製鍋一口、穴あき錢を十二枚鉄線でないだ幣串の銀銭に該当するもの二連が見出されている。刺を容れた鍋、幣串に挿さむ銀銭がそれである。恐らく他の多くの品目が同時に埋められていたものと考えられるのである。酒粥を地神に供し、真言、呪を誦え、廻向し撻遣する、そうした中で地神がこの呪儀を承け、この地、この穴を法界宮と化するのである。撻遣は法界宮に対して為す肝要の呪儀と説かれているのである。地鎮、鎮壇安鎮、鎮宅、多くの言葉が世に在るが全て相異なるものである。地鎮は人家の鎮め、安鎮は堂塔の鎮め、鎮壇は基壇に付いて、また地鎮は何れにも通じ用いる名と一般に言いならはされている。古代には安鎮、鎮壇の呪儀が多く見られ、後世とくに江戸時代、四種の鎮めが広く、多用されるに至り、そのまつりも複雑に整備されていくのである。

三、立柱・上棟呪儀の世界

地鎮、鎮壇の呪儀を経て行なわれる呪儀は立柱、上棟をめぐるまつりである。たとえば法隆寺金堂の諸柱の頭貫に接する木口に、穴を穿ち桃を収めた事実が知られている。立柱の過程でないかぎり穴を穿つこと、桃を収めることが出来ぬだけに、立柱の呪儀の一環、その一駒であることが容易に窺えるであろう。『事物紀原』には「元日に桃版を施して戸の上に着く。之れを仙木と謂ふ。鬱壘山の桃は百鬼之れを畏るるが故なり」とあるし、『日本書紀』にも岐美二神をめぐり桃実が辟邪の機能を果たすことを説いている。桃字が逃と音通することをも勘案するならば、立柱に当り辟邪摧破するために柱内に桃核を蔵した

ものと考えることができよう。建物の永遠を願い、また邪気穢氣に犯されることのなきよう桃核をもってその願意を達そうとしているのである。立柱の意、呪儀の本質を鮮やかに語る資料といえよう。

柱に籠められるもの、それは桃核ばかりではない。鎮めものとして鉄丸を収める資料もまた数多いのである。滋賀県中主町の白子邸では大黒柱を削り抜いた穴に鉄丸を容れた木箱があった。こうした鉄丸を鎮丸と仮称するならば、その例は和歌山城紅葉山庭園客殿をはじめ幾例かを挙げることができる。最近見ることを得た鎮丸は、その球体の八方に乾兌離震巽坎艮坤の秘符を記し八方神を象った星宿をかく。元来ならば將軍木(ヌリデ)の板、長さ五寸巾三寸の八枚に八方神、乾兌離以下の秘符をそれぞれ朱書し、裏には乾元亨利貞勅—四徳文の符形



を墨書し、宅地の八方の土中に埋め、中央には別に長さ七寸二分、幅五寸の板に四徳文の秘符を記して埋めるといった呪作があり、新宅地—屋敷地を鎮める呪儀に用いられるのであるが、やがては立柱の際にも、八方諸神・中央神に奉齊し、永遠の建物堅固を得るためにこうした鎮丸が用いられたのである。同様、本来は地鎮に主用されていた呪儀が立柱と関連づけられて存在する場合もまた見られる。例えば、高野山金剛峯寺大門の解体修理に伴い、小屋組の頭貫斗の側面に長方形の穴を穿ち、内に蓋をした賢瓶が発見されたという。賢瓶を輪楹と共に主用する呪儀が地鎮であることを想えば、地鎮が建物の永遠と居住するものの平安を願う行為だけに、同じような想いが立柱にも働いていると考えてよいであろう。

昭和四六年から足掛け三年にわたって大阪府交野市に所在する重要文化財建造物山添邸の解体修理が行なわれた。その際、母屋の屋根裏棟木に一枚の板札が打ちつけられている事実が知られた。長方形の板(字面上段右)札の中央には「彌射隠々如律令の句が大書され、右に皆歳次宝永癸酉二季、左に寺村九左衛門平精、やや行をずらして三月大明日の文字が墨書されている。棟木に釘うちされてはいるもの一般に棟札と呼ばれるものとはやや趣きの異なるものである。この中央の二字は直接意味するところは不明であり、由来も不明であるが『呪咀重宝記大全』などによれば、悪難を払う御符とされ、病難・盗難・火難、その他一切の厄難を防ぐとその効を説いている。従って棟札と異なる一面をもつが、家宅の新築に当り火難や、一切の難を鎮める札—鎮札として働いていることを教えているのである。宝永二年三月大明日といった表現から陰陽師なり社司の関与が読みとれるのである。この種の鎮札と関係して注目されるのは、滋賀県近江八幡市内の園田六兵衛邸の一枚札である。兼康保明氏の教示によれば札は尖頭平底の棟札であり中央に奉上

二
七難即滅
七福即生

奉
上棟祭神家門榮之守護

天保第七年

工匠棟梁 田村加賀

丙申三月吉祥

日雀頭 ヒメ村 四郎兵衛

急急如律令 辨

禰
乾元亨利貞家運長久處女

天保七 陰陽師
丙申春 林旭大洞

棟祭神家門榮久守護の文字、右に天保第七年・工匠棟梁・田村加賀
常治郎、左に丙申三月吉祥・日雇頭・ヒルタ村・四郎兵衛の文字、裏
には卦七難即滅七福即生の句が書かれている。この棟札と同年月を示
す一札が注目を惹く札である。札の中央、頭に以点をうち、五岳五帝
真君中の玄武かと思われる符を記し、その下に乾元亨利貞家運長久處
☆とつづけ、右に天保七・陰陽師、左に丙申春・木邑大隅の文字を容
れている。裏面にはタラクの種子を頭に置き唸々如律令と書し九字
・敬白と記す。符中の五岳五帝真君の玄武は北を指す真君であり、乾
元亨利貞の句は易経の最初の句である。裏面の唸々如律令の句は律令
の如く唸ぎなれの意であり、鬼よ災厄よ速やかに去れの趣旨の句であ
る。九字を配してこの趣旨の完全な効果を願っているのである。この
園田邸の札は、棟札と共存するだけに鎮札として息ずいたものである
ことは明白である。こうした札の背景に陰陽師木邑大隅の介在するこ
ともかような呪儀を司る者の実態を伝えるものとして重要である。棟
札と鎮札といった二者が棟上げに際して用いられ、前者が神道風に、
後者が陰陽道風に実修されている様が手にとるよう(字裏上段を)に窺えるのである。
一方、大阪府鴻池新田会所の米蔵に見られる棟札の世界を見よう。
大きな棟札の中央には、奉造立上棟天真井水栄永繁昌守護之所と丁寧
に大書し、右に干時享和二年六月二十二日巳之刻、左に祭主玉造
森之宮神主、近藤大隅藤原重治の文字があり、裏面には一・二・三・
四・五・六・七・八・九・十と大書し、下右に布留部由良由良、下左
に由良由良布留部、この二行の下、中央に小字で神主の文字をしたた
めている。表の文字は豪商鴻池家の会所米蔵にふさわしい吉句の連な
りであり、棟札としては普遍的な枠組のものと見えるが、棟上げに際
し森之宮神社神主近藤重治の関与が明示され、これが神道流の上棟式
に則り実修されたものであることが判然とするのである。ところが裏


面の十に至る数字や布留部由良由良の句は、極めて重要な神道流の言辭であり、陰陽道を介しないもの、しかし鎮札的性格をもつものとして注意を惹くものなのである。まず一より十に至る数は布留部由良由良山由良布留部一ふるへゆらゆら・ゆらゆらふるへの言葉と共に『先代旧事本紀』に見え、鎮魂祭の起源を説くシーンに登場する。物部氏の祖、宇摩志麻治尊が饑速日尊の携え来った十種の天璽瑞宝を用いて帝後の御魂を鎮め寿祚を祈禱する。こうした鎮魂祭の場で一から十まで十種の瑞宝を振り動かし算え上げ、またそのたびに糸を結び魂魄の結びどめを計る。その言数が一から十までの数である。布留部由良由良の句は十種の神宝を振る様であり、その振る動きが霊をふるいたたせ身に触りつく、そうした語義をもつものと考えられているのである。御衣篋を振り動かし揺ることに呪作は動いていくが、いずれにしても霊魂がふるいたちゆらゆらと崩れ出る。その霊能を算え結び上げて相手に新らたなる生命を与え鎮めることに本義があるのである。鴻池家の基盤となる新田開発、その根源となる会所米蔵の新造棟上げに当り、森之宮神社神主近藤重治は、まさに生れ出でる豪富の象徴、米蔵の前で、こうした霊魂の崩れる力を建物に鎮めるべく呪作しているのである。神道流の上棟のまつりにあってこうした鎮魂祭の呪儀が世界を得ているのである。


棟札と鎮札といった世界と共に興味を惹くものに棟に上げられた鬼瓦の世界がある。奈良県田原本町の町屋の棟には鬼面を作らず、目を二行五字連ねその間を×で繋ぐ呪符と唸々如律令の呪句を陽出している。十鬼とかかわるものであろうか。火、所望、沙汰、愛染、疫病、他福、息災、軍戦、万病、物恠に対し十唸が定められているが、この十事が十鬼に係るものである可能性もあろう。勿論、十唸は唸々如律令の唸字を十態に分け書き別けるものであるが、こうした内容に対応

する場合も十分考えられるであろう。牛玉宝印や干満宝珠を表現した水字を容れるというように金銀財宝の充満・火災水難の辟除に対応してこうした各種の鬼瓦が作り出されているのである。屋敷地取作法から、地鎮、鎮壇、立柱、上棟と経て葺瓦の段階でもこうした除災辟邪がつよく意識されているのである。家宅を営む、屋敷を設ける、人生の大事であり、未来へ強く繋ぎ、しかも家族の将来にも係るだけに、こうした辟邪除魔のまつり、呪儀がそこには色濃く漂い、幾度びも幾度びもとり上げられていくのである。

四、屋固・移徙呪儀の世界

家作普請が成就して家人が移徙する前、その完成した宅前で屋堅一屋固の呪儀が実施される。神弓神矢を持ち邪気陰悪を射破う、こうして家宅の長久と家族の繁昌を祈禱するのである。破魔弓矢と通ずる心根を家宅に持ちこみ、最終の宅邸の鎮めをはかっているのである。土金守護を祈り鬼門神荼毘墨二神が常に方位を鎮護するのである。こうした屋固の呪儀に伴い呪札が用いられる。新宅中央に不動の種子を書き聖主天中天・迦陵頻伽髻、哀愍衆生者・我等令敬札の文を墨書した札を樹て、北に種子と金剛夜叉明王守護、西に種子・大威徳明王守護東に種子降三世夜叉明王守護、南に種子軍荼利夜叉明王守護の文字を記す札を打つ。こうした四方中心を点じた方札とは別に大日如来の種子パンを頭にしてお下を二行に分け、右に一切日皆善・一切宿皆賢、諸佛皆威徳と三句、左に羅漢皆行満、以斯誠実言、願我成吉祥の三句を記す屋固札が釘打たれるのである。方札と組み合わせた屋固札の世界が浮かび上がると、地鎮とも屋敷地取作法とも相い通ずる思惟のもとに屋固めの呪儀のあることが判然とするのである。こうした屋固札は奥野義雄氏の教示によれば奈良県室生の松井邸にも見られる。札の

屋固札

 一切白皆善 一切宿皆賢 諸佛皆感德
 羅漢皆行滿 以斯誠實言 願我常吉祥

方違札

 一切白皆善 一切宿皆賢 諸佛皆感德
 羅漢皆行滿 以斯誠實言 願我常吉祥

屋固札
 一切白皆善 一切宿皆賢 諸佛皆感德
 羅漢皆行滿 以斯誠實言 願我常吉祥

棟札
 一切白皆善 一切宿皆賢 諸佛皆感德
 羅漢皆行滿 以斯誠實言 願我常吉祥

上部に大日の種子パンを配し、その周囲に法界種相形如圓塔の八字を時計回りに墨書し、下方中央に梵文を容れ、右に一切日皆善、一切宿皆賢、諸仏皆感徳の三句、左に羅漢皆行滿・以斯誠實語、願我成吉祥の三句を書く。裏面も同文であり、上下を釘うつものである。札中に文政十三庚寅三月廿八日押の文や左右衛門・甚五、山神社大幢の人名も見られ、棟に押札した日時・屋固の呪儀を実修した日やその建築を果した左右衛門・甚五といった大工棟梁、呪儀を実修した山神社の神主陰陽師の名もそこに見られるのである。棟札と共通する種子、六句文をもつ屋固札の存在は、その二者の絡み合いを示すものであり上棟の呪儀で棟札を打ち、つづく屋固の呪儀で屋固札を棟に打つ。時には重さなり合い、時には相つづく一連の呪儀のように理解されたのである。ろうか同趣同文というべき様の札が二つの世界に見られたのである。

上棟・屋固の呪儀と密接に絡み合う呪儀として注目されるのは方違の呪儀、火伏の呪儀である。屋固の呪儀に当り四方中央の柱に方位に係る札をうち、棟に十字を八字円相に容れ一切日皆善札を主札として打ちつける事を記したが、同様な例は火伏の呪儀にも見られるのである。「修験深秘行法符咒集」には、中央に大日の種子をおき、周囲に鑊字法界種相形如円塔以理智不二名法身塔と卅字を円に連ねた符を掲げ、その略は、鑊字法界種相形如円塔の十字を円形に並べるものであることを記している。中央の大日の種子が鑊だけにこの二字を除くとこの畧符は屋固札の八字円符法界種相形円塔と共通することとなるのである。それだけではなく一切日皆善等の六句は見えないが四方の柱に降三世以下金剛夜叉に至る方札を打つことが記されて居り基本的には屋固札、屋固の呪儀と火伏札、火伏の呪儀が相に通ずるものがあることをよく物語っている。同様、札において共通するものに方違札がある。大日八字円相を札上部におき一切日皆善以下の六句を配する点、その一致は鮮やかである。ただ、副符として、年年大好年、月月大好月、日日大好日、時時大好時といった天地八陽經文を墨書する札を打つ点に特色をもつといえよう。

棟札、屋固札、火伏札、方違札といった鎮めの札が符においても句においても共通する面がつよいことは重要な事実である。こうした上棟、屋固、火伏、方違といった呪儀が家宅の完成前後の家宅の鎮めとして願われ実修されているのであるが、それらの呪儀は相互に関連し混濁し、時には並祭されるといった形がとられたのであろう。上棟に当り鎮めの呪儀が、完成した家宅の永遠を祈り屋を固め火を防ぎ方を遡るといったまつりが執行されているのである。堅固長久の家宅を期するだけにこうした呪儀が詳細に体系化、組織化されるのである。ところと興味ぶかい事実がある。「鎮土法」には地鎮土公供也、亦

鎮宅鎮方ニ用之として鎮土法—地鎮祭法を記しているが、その祭文として「五帝龍王は犯する者あれば崇りを致し慎しむ者あれば賞を施す：予が憑む所は迷故三界城悟故十方空の明文、仰ぐ所は一切日皆善一切宿皆賢の誠説なり：」の言辞が見え、祭文を読み上げて後、金剛合掌し「迷故三界城、悟故十方空、本来無東西、何處有南北、一切日皆善、一切宿皆賢、諸仏皆威徳、羅漢皆斷漏、以此誠実言、願我常吉祥」と唱え、次に天地八陽經文に云うとして「年年大好年、月月大好月、日日大好日、時時大好時」の句を唱えるとしているのである。棟札、屋間札、火伏札、方違札に見える呪句の全てがこの地鎮土公供法—鎮土法の法則中に見えるのである。地鎮、鎮壇から上棟、屋間に至る呪儀が非常に複雑な体系と整正な体系を具えるとしても、その基盤となる思惟は、同一の除災辟邪の呪儀を繰り返し繰り返し実修することにより効を得ようとするものであったことを物語っている。

五、新宅・移徙呪儀の世界

種々の呪儀に包まれて家宅は成る。その完成は屋間・火伏・方違の呪儀の実修でもって証されるのである。全ての備い、装い整い完璧な安宅の想ひにつつまれた中で、この新しき宅への移りが計画されるのである。この移徙は、また重要な呪儀であった。たとえば移徙の作法としては「第一童女二人一人撃、水一人撃、燭、第二一人牽、黄牛、第三一人撃、案上著、金宝器、第四二人持、釜内著、五穀、第五家長、第六一人撃、馬鞍、第七子孫男、第八二人持、箱盛、繪錦採帛、第九一人持、飯之内五穀飯、第十家母帯、鏡於心前」と家移りする順次がまず掲げられている。単に新宅が完成したから直ちに好きなように移るのではなく、一定のしきたり、作法に基づいて移徙していくのである。この序列を誤まり、持物などに誤りがある場合は、新宅に穢れを生じ、家族にも

新生活にも穢過を生ずることとなるのである。水・火童がまず第一に動き移ることは井・竈に係り屋敷神の移徙が人間の移徙に先立つことを示し、移徙の意味をよく物語っている。まさにこの移徙の列は祭式の列であり、その撃げ持つ器物器財は新宅の核となるもの、しかも種々の盛物・内容を具えての移徙であり、まさに家々のそれぞれにある神の移徙といえるであろう。作法はつづけて、水・火・金宝器・馬鞍・錦繪綵帛の類は堂に入れ、釜内・飯内の五穀飯は大炊に入れ、黄牛は庭に繋ぎ飲みしむべしと述べ、家長母は堂内に南面して坐し五菓を食し酒酌を飲む。入宅の明朝門戸、井、竈、庭、厠などの諸神を祀り、瓶内に盛りたる五穀をもって三日間祀る。移徙の後三日間は殺生をせず、歌わず、厠へ上らず、悪言をはかず、薬をせず、刑罰せず、高きに登らず、深きに臨まず、不孝なる子を見ず、僧尼の入るを忌むといった作法が記し留められている。新宅に移ること、まさに深甚の注意が穢罪に向けられ、諸神の奉祀に意が集中しているのである。正しい神の移徙、人の移徙があつてはじめて新しい家宅は、生を得るのであつた。家宅は人と共にあつた。人は神と共にあつた。こうした時代、家宅を新しく営むことは、単に家作だけのことでなく、神の、人の神・人・家の新しき誕生、新しき関係の息ずきはじめを意味するのである。家も人も神もともに甦える。そうした想ひの中に家作が位置づけられているのである。本稿では、家作を通じ、屋敷作りを通じてのまじないに稿を終始することとなつた。神・人と共にある家のイメージ、共に息ずいた過去の想いからするならば、古び行く家の姿への想い、水濁る井への想い、不浄に汚れた竈への想い、こうした想いの高ぶる中で常にその鎮静、安鎮を願って精緻な体系をもつたまじない世界が活きるのである。まじなひ世界の中に人々の、神々の、家々の想ひが、心根の揺れ動きが秘められているのである。

Magical Rites of Ground Breaking Ceremony

Masayoshi Mizuno

Summary

This paper tries to reconstruct an archaeological site, excavated at Kōyasan-Kongōbuji Temple, of ground breaking ceremony. Then the character and genealogy of some sites as to castle, shrine, temple, and private house construction are to be examined, observing their actual features. The author also reconstructs some ceremonial sites of laying foundation stones, erecting pillars, or raising framework in a process of the construction, to recognize how they made those buildings stable, perpetual and peaceful according to the magical rites mentioned above. By these works I will grasp the relationship between peoples and the magic rites for the constructions in the Middle and Modern Ages in Japan.